

『余地』

～相談業務を楽しむ方法21～

<こんなはずではなかった>

杉江 太朗

～学生用マンション建設を巡って～

自宅近くの空いた土地に、学生用マンションを建設するか検討しているという方がいて話を聞く機会があった。銀行から大きな借入をすることになるが、ローンは毎月の家賃収益で返済しつつ、尚且つ貯蓄も可能で、さらに税金対策にもなるとの勧誘を受けているとのこと。

私が、訝しそうな反応をしていると、当然そんなにうまく進む保証はなく、学生用マンションは絶えず新しい物が建ち続けるため、人気があるのは最初の数年、尚且つ大学生であれば、卒業と同時に退去することが多いので、入居率を維持することが難しい場合もあり、建設時に見込んでいたような収益が得られない可能性があるとのことであった。さらに大学が立ち退きになるとたちまち借主が減ってしまう。さらに、マンションを修繕するための費用も追加で必要になり、災害時の対応など将来のリスク管理も必要で、簡単に踏み切れるものではないとのこと。

この話とは少し異なるかも知れないが、例えば水道事業を巡って、過去に設置を

した水道管が耐用年数を超過してしまい、その修繕が必要となり、その費用を捻出するために、水道料金を値上げする自治体があるとのニュースを耳にしたことがある。

また、豪雨災害により、盛土が崩れたというニュースも報道された。盛土がどのような経緯で置かれたのかはわからないが、結果として災害を引き起こしてしまった。水道の工事にせよ、盛土にせよ、人為的な行動の後には、その先がある。そのことがわかるのが、1年後なのか、10年後なのかはわからない。さらに、良い結果なのか悪い結果なのかもわからない。そのような先を見通した決定がどの程度されているのであろうか。

～こんなはずではなかった～

私自身の記憶ではもう、遠い過去になってしまったが、その最たるものがオリンピックではないか。様々な自治体でその開催に向けて準備をされ、競技施設の整備、宿泊施設や選手村の建設などに投資をしたのではないだろうか。特に東京などは、開催に向けて大きな事業展開が

あったに違いない。実際に、東京オリンピックの関連施設を建設するために、父が単身赴任をしているという話も聞いたことがある。各自治体でも、それぞれの選手団を受け入れるキャンプ地として様々な企画を計画していたように記憶している。

そのために大きな支出をした自治体は、新型コロナウイルスの影響で開催時期がずれ、さらに大会そのものの縮小を余儀なくされたことで、「こんなはずではなかったのに・・・」と思っていたのではないだろうか。そもそもオリンピックを誘致したその関係者の人も、「こんなはずではなかった」と思っていたかもしれない。新たに建設したものには、建設費用だけでなく、その後の管理費用も必要となる。新しいものは将来古くなるのは必然である。オリンピックという世界規模の大会で収益をあげ、将来かかるであろう費用をその収益で賄うつもりであったのかもしれないが、開催規模が大きく変わったことで、将来的に管理費用による赤字が続くとも言われているようである。

当然、誰もが未来を読むことは出来ないし、オリンピックの開催が決まった時点でも、開催そのものに対する賛否はあった。しかし、新型コロナウイルスという、未知の感染症を理由にその開催の是非が問われたり、収益が減収したりすることは想定外であったと思う。しかし現実には起こっているのである。自治体だ

けでなく、インバウンドを期待して、宿泊施設（例えば、ゲストハウスとか）を開業した方も多いはずである。皆、オリンピックによる利益を得ようと考えた人たちは「こんなはずではなかった」と思っていたのではないだろうか。

冒頭に書いた学生マンションの建設を検討された方は、将来のリスクを考えて建設をしないという選択をした。そして、偶然ではあるが、その数年後、近隣の大学の立ち退きが決まったらしい。寝耳に水の話で、その自治体は、人口が流出し、地域経済を縮小させるとの理由で、撤退をしないように求めたらしい。その後、その方に話を聞くことはなかったが、少なくとも「こんなはずではなかった」とは思うことはなかったであろう。

人が何か決断をするときには、将来のリスクにも目を向け、自分がした『決定』の先にある結果がどのようなものであったとしても責任を負うという覚悟が必要である。そうしたリスクを引き受けた上での決断であれば、仮に思い描いたような結果でなかったとしても「こんなはずではなかった」と振り返ることはないのではないか。むしろ、思い描いていなかった結果を受けて、今、出来ることや次にすることを考えているかもしれない。自身の行動が招いた結果に対して、「こんなはずではなかった」と振り返っていること自体、その決断や決断に至るまでの過程が浅はかであり、さらにその結果を

引き受けられていないと思う。

～対人援助における「こんなはずではなかった」～

マンションの建設やオリンピックの誘致と同様に、対人援助領域においても決断が求められる場面はあり、それは1度や2度だけではなく、決断が求められる場面が連続して到来する。それは、法的な対応を取るかどうかという大きな決断もあるが、一方で、接触をしなければいけない相手に対して、どうやって連絡を取るか、電話？メール？直接訪問？というような決断まで多岐に至る。

どのような場面でも、私が大切にしていることは、自分のした決断がその先、誰に、どこで、どのような影響を与えるのかなどを踏まえて検討して導き出すということである。「ただ何となく」とか「思いつきで」というような決断にならないことを大切にしている。

児童福祉領域の課題とも言える部分に、担当者の変更が目まぐるしく、人事異動や退職などもあり、連続して関われる期間は2年～3年でサイクルしているということがある。そのことにより、自身の決断したことの「結果」を見たり、知ったりすることがないまま転勤をしてしまうことが往々にしてある。例えば、施設入所という決定をした後に、人事異動などで担当から離れてしまうと、その子どもがその先、どのような未来を歩んだの

か知る術がないのである。私は、専門職として採用され、基本的に人事異動がないため、出会った子どもが、成人して親になったという連絡を受けることもある。他者がした過去の決断に対して、その検討が浅はかであると感じることも少なくはないが、当然、全てが思い描いたようになるわけもなく、思い描いたようにいかないことしかないため、それぞれの場面で、数ある選択肢の中から、少しでも良いと思う決断をする毎日である。

～決断すること～

決断をするということには責任が発生する。ここで言う責任とは、誰に責任があるのかというような、事件があったときに擦り付け合われるものではなく、決断をした結果を引き受けるといふ、ようは「腹をくくる」ということである。その責任を負うことにより、「こんなはずではなかった」と過去を振り返るのではなく、まず先に、その結果を受けて、「次の一手をどうするか」「今何が出来るのか」「今出来る、最善策は何か」を考え、さらに並行して「最悪の事態」を常に想定し、そうならないための策を練り続けるのである。

児童相談所における「最悪の事態」は、子どもが亡くなるということである。常に、「子どもが死ぬか、死なないか」ということを念頭に置きながら、限られた時間、限られた社会資源の中で、優先順位

をつけて決断をする毎日である。他の児童相談所で働く方もそうではないだろうか。それでも、事件は後を絶たない。社会的関心の高まりや人の感情を揺さぶるような報道が続くこともあり、注目を集めやすい。そのことが、現場の職員の不安を馭り立てており、疲弊にも繋がっている。しかしそれがこの社会の現実なのである。その中で決断をしなければならぬ日々が続くが、「こんなはずではなかった」と振り返るのではなく、「これからどうするか」を常に考え、常に目の前の子どもに対して最善を尽くさなければならぬと考えている。